

浅川 京 在 会報 八二号	発行日 令和二年二月 発行責任者 関根一男 埼玉県本庄市一七七一 電話〇四九一五二一八八四一 編集者 宮城 肇
---	---

・第三十三回総会・懇親会

十一月二十一日(土)

いずれも上野精養軒にて

あさかわ寅吉会

No.4

利平の古里

浅川町里白石 相田 道代

昨年十二月二十一日、令和二年度、新役員による第一回の役員会を開き、総会の反省と今年度の行事計画について検討しました。

ふるさと訪問の旅

四月十九日(日)・二十日(月)

実施予定

二年に一度、懐かしい故郷の城山で、浅川町の方々の歓迎を受け、花見を楽しみながらの歓談は格別の喜びです。今年も顔見知りの会員同士、また古里の仲間にも声を掛け合い、一緒に参加し旧交を温め合いましょう。詳しくは追って通知致します。

理事会及び総会の日程

- ・ 第一回理事会 二月十六日(日)
- ・ 第二回理事会 九月 六日(日)

昨年十一月、石川町郷土史家の吉田利昭さんが、三大石工の一人、小松利平の故郷である長野県伊那市高遠町で「高遠石工の足跡」をテーマに講演されました。野出島地域活性化プロジェクトとあさかわ寅吉会の会員も同行し、高遠町公民館長の原和男さん、同町本総合支所長の広瀬源司さんに案内いただき、二泊三日で訪問してきました。

高遠町は本県ととてもゆかりの深い地です。会津藩初代藩主保科正之公の故郷であり、信濃高遠藩七代藩主内藤頼寧公の娘が一八三八(天保九)年、白河藩四代藩主阿部正備公の正室になっています。この時期に、高遠石工が本県の県南地方に移ってきたと記された石碑が、浅川町福貴作の利平と小松寅吉の採掘場に残っています。利平が福貴作に工房を構えたのも天保年間です。関連は分かりませんが、何かの縁だと感じています。

城下町らしく歴史を感じるきれいな街並みの真ん中に公民館があり、原さんと広瀬さんが温かく迎えてくださいました。打ち合わせのため公民館の中に案内され、館内に張られた講演会のポスターを見て胸が熱くなりました。二階にはちぎり絵で作った保科正之公の大きな顔が掲示され、「大河ドラマ実現への署名状況 十月十九日現在五十八万五千三十一人」と表示されていました。高遠町民が持つ保科正之公への熱意は、会津地方の人々と同じであると実感しました。

公民館を後にし、いよいよ利平の出身地へと案内されました。高遠城の前を通り、入野谷地区を過ぎて道幅の狭い道を進み、到着したのが標高約千メートル、住宅が八軒のみの浦というひっそりとした集落でした。そこに住む八十九歳の小松忠人さんに、約百八十年前の利平の話を伺うと、「この先にあった奥浦という集落の出身ではないか」とのことでした。奥浦は一九六一(昭和三十六)年の災害で被災し、全戸移住して今はなくなってしまうそうです。

地元の教育委員会によると、浦集落は平家の落人の里といわれています。平家物語では那智の沖で入水した事になっている、平清盛の子どもの維盛が、実は生き延びて信州の浦までたどり着いたそうです。小松内大臣や小松殿と呼ばれた重盛と同様、維盛やその弟たちも小松姓の系譜です。古老たちは「壇ノ浦村」を自稱し、平家とゆかりのある宇佐八幡宮を祭っていました。敵見岩と呼ぶ岩に見張りを置き、家紋はアゲハチョウで、平家が持参した衣や燭江の錦を持っていたそうです。浦出身の利平のご先祖は、平家であったのです。

当時、重たい鑿(のみ)の道具を担いで高遠町から浅川町福貴作まで往路することは、かなりの時間と労力を費やさなければならなかったと想像に難くありません。それでも、山奥に住むより、良質な福貴作石があり、起伏がない土地に住む方が全ての面で利便性が良かったのでしよう。浦集落を見て、利平が先祖の位牌(いはい)まで持ち込んで福貴作に移住した理由が、自分なりに理解できた気がします。

(あさかわ寅吉会代表)

季節のうた(第四八回)

小針 光(八千代市)

つくづくし故郷の野に摘みし事を

思ひいでけり異国にして 正岡子規

「歌意」つくづくしはつくし。異国(ことく)にはここでは故郷でない東京。

「つくしほど食ふてうまきはなく、つくしとりほどして面白きはなし、碧梧桐(きぎとう)赤羽根村に遊びてつくしを得て帰る、再び行かんといふに思ひやり興じて

よめる」との前書きを有する。子規の故郷松山で土筆（つみは）つみは、男も女もする楽しい遊びだったという。故郷を遠く離れた東京で病（き）む悲しみが伝わってくる。

「補説」この歌は明治三十五年作、十三首連作の一首。この年の正月「子規庵」の近所へ碧梧桐（愛弟子）が引越して来たが、三月末に一家とともに赤羽根村（現在の東京都北区赤羽、明治十五年には日本鉄道赤羽駅開業）へ土筆摘みに行つた四才下の妹律（りつ）が、

「土筆取りには籠（かご）を持って行くがよい。」と楽しげに独り言を言つたのを聞きとめて」の次の一首がある。

女らの割籠（わりかご） たずさへつくづく

し／摘みにと出る春したのしも

ここでの割籠は、摘んだ土筆を入れる弁当箱のような容器。妹は二度の結婚に失敗し、家事と兄の看病人となり、子規にとつても普段娯楽のない妹の参加は嬉しかったらしい。

（歌意『日本秀歌秀句辞典・小学館』

《作者正岡子規略歴》

明治十八年（一八八五）十八才。哲学者切望。学年試験に落第。夏目漱石も腹膜炎患い落第（以後首席を通す）。和歌を学び、初めて俳句作る。

明治二十年、ベースボールに熱中。左投げのキャッチャーとして活躍。夏帰省し俳諧（はいかい）学ぶ。

明治二十一年、二十一才。夏休みに向島桜餅屋月香楼に過（ご）し、俳句、短歌、随筆を書く。八月鎌倉に遊び、略血。

明治二十二年、夏目漱石との交友始まる。五月随筆集『七草集』完成。略血続く。時鳥（ほととぎす）の句を四、五十句作り、子規と号した。十二月東海道、関西を旅行し帰郷。

明治二十三年、夏目漱石と手紙で文学論をかわす。九月東京帝国大学文科大学国文科に進学。幸田露伴の『風流伝（ふうりゅうぶ伝）』を読み傾倒する。

明治二十四年、二十四才。六月学年試験を放棄し、本郷駒込に一戸借り住む。小説『月の都』を書きはじめ、「俳句分類」の大業に着手。

明治二十五年（一八九二）二十五才。

二月、下谷区根岸町（現在台東区根岸）八十八番地に転居。『月の都』の批判を露伴に乞う。が、推賞得られず小説家断念。七月学年試験落第。九月大学退学。十一月、母と妹を東京に迎える。十二月、叔父（母の弟外交官）の親友で生涯の恩人となる陸羯南（くがかつなん）の経営する日本新聞社に入社。

（参考文献『明治の文学正岡子規』筑摩書房）

《余談『病床子規の食欲』》

子規の晩年の散文を愛した司馬遼太郎は、『子規の生涯は、三十五年しかなかった。病床にある最後の七、八年で、子規

は子規そのものを確立し、日本の文芸思想の基礎的部分に徹底的な変革を与えた。このことは子規らしい陽性の使命感から出ていて、私欲という夾雑物はほとんど見られない。欲望というのは、食欲だけであった。なみはずれた胃腸の丈夫さがその肉体を奇跡のように維持した。』との文章を残している。

愛弟子の一人河東碧梧桐にいたっては、「いくら食うことだけが一日の楽しみであると言つても、ああしてよく食べるものだ、と我れ我れの健康者をいつでも驚かしたものだ。親子でも鰻でも井一つを食い残すということはなかった。」と書く。

「病床六尺これが我が世界である。」と書き出す『病床記』『仰臥漫録』にこの日の食事を記す。

「朝」粥（かゆ）四碗、はぜの佃煮、梅干砂糖つけ 「昼」粥四碗、鰹の刺身一人前、南瓜一皿、佃煮 「夕」奈良茶飯四碗、なまり節煮、茄子一皿

この頃食ひ過ぎて食後いつも吐きかへす 二時過牛乳一合ココア交せて、煎餅菓子パンなど十個ばかり、昼食後梨二つ、夕飯後梨一つ（今日の夕方大食のため下腹痛くたまらず）

子規にこの年に詠んだ次の句がある。

土筆煮て飯（めし）くふ夜の台所

この句からは、病床の子規が夕食した後、母と妹の二人が台所で質素な夕食

を取っている。病人には何をさておいても栄養のあるもの、好きなものを十分に食べさせている家族の思いやりが浮かんでくる句である。

（参考文献『新潮日本文学正岡子規』他）

ふるさと産品（七）

浅川の魔除花火

今回ご紹介するふるさと産品は、みなさんも何度か目にされていると思いますが、改めて魔除花火をご紹介します。

ご存知のとおり、浅川の花火は供養花火として始まっており、魔除けの由来は、打ち上げられた花火のカラーには八百万の神々の御札が貼られ、焰硝の臭いと共に、悪霊退散、無病息災の魔除けと、五穀豊穰の願いを込め、軒先に吊るす習わしがありました。

この習わしから作られたのが、魔除花火です。実際の花火に使用されるカラーを使つて作られており、大小様々なサイズがあります。



0. 4寸300円～尺玉8,000円
問合せ 浅川町商工会青年部
むらおこし実行委員会
☎0247-36-2161